

世界の壁を打ち破れ！ ブラインドサッカーワールドグランプリ 2019

小さな音を立てながら、ボールがピッチを駆けめぐる。選手たちは掛け声とともに走り、ぶつかり、それを奪い合う。シュートが放たれ、ボールがゴールネットに飲み込まれる。歓声が、じっと試合を見守っていた観客から一気に湧き上がる――。IBSA ブラインドサッカーワールドグランプリ 2019が、3月19～24日、東京・品川区立天王洲公園で行なわれた。世界8か国の代表が参加し、22日を除く5日間で、延べ5,000人以上がスタンドから試合を見守った。優勝はアルゼンチン。日本は4位という結果だった。 (本誌)

静寂の中の熱狂

IBSA ブラインドサッカーワールドグランプリ (WGP) は2018年に第1回が開催され、今年が2回目。国際視覚障害者スポーツ連盟 (IBSA) 公認の大会で、2020東京パラリンピックに向けて、3年連続、日本で開催されることが決定している。IBSAとともにWGPを主催するNPO法人日本ブラインドサッカー協会では、「ブラサカ」の愛称も浸透しつつあるブラインドサッカーの周知と普及に向けて、「類いまれなる機会」と考えている。日本代表にとっても、世界の強豪国と熱戦をくり広げる中で、強化が図られるという大きな意義のある大会だ。

日本での競技人口は、晴眼者を含めて500人ほどといわれている。同協会の前・代表理事である釜本美佐子さんは、元・サッカー日本代表の釜本邦茂さんの姉であり、ブラインドサッカ

一の普及には、北澤豪さん・中西哲生さん・山口素弘さん・名波浩さんら、著名な元プロサッカー選手も協力している。

ブラインドサッカーの選手は、鉛の粒が入ったボールの「シャカシャカ」という音、ほかのプレーヤーの声や気配、ゴールキーパー・ガイド・監督の指示などを頼りにプレーする。だから、観客は静かに観戦し、その様子は「静寂の中の熱狂」とも呼ばれる。そして、ゴールが決まった瞬間、選手らとともに、大きな歓声をあげるのだ。

ルールはフットサル（5人制のミニ・サッカー）を元に考案されており、アイマスクをした全盲者4人のフィールドプレーヤーと、弱視者もしくは晴眼者のゴールキーパーがピッチ（競技場）に立つ。試合時間は前半・後半それぞれ20分だ。

ピッチはフットサルと同じ縦40×横20メートル。ただし、サイドライン上には、高さ約1メートルのフェンスが立てられている。ボールや選手が飛び出すのを防ぐためのものだが、選手の位置の確認や、ボールをバウンドさせるパスにも積極的に使われる。ゴールは縦2.14×横3.66メートルである。

ボールを持った相手の選手に向かうとき、衝突を防ぐため、守備側は「ボイ（Voy）」という声をかける。スペイン語で「行く」という意味で、発声しないとファウルになる。

相手チームのゴール裏にはガイド（コーラー）、自陣のサイドフェンスの外側には監督がいる。キーパーはゴールエリア（縦2×横5.82メートル）の中だけでプレーし、自陣での守備について指示を送る。ガイドはゴールの位置や選手との距離・角度を声や音で伝える。そして監督は、選手交代の決定などに加え、ピッチ中盤でのプレーにも指示を出す。チーム全員の高度なコ